五感を使わざるを得ない玩具の開発

学籍番号：5111022
氏　名：川田彩香

Ⅰ．研究のきっかけと目的

実際に保育所で幼児と関わるなかで、現代の幼児を取り巻く玩具が視聴覚に偏っていることが気になった。保育現場では「先生見て」「聞いて」という言葉が飛び交う中で「触って」という言葉は非常に少ないように感じる。これは玩具で遊ぶ活動は取り入れているが、事物に「触れる」ことを楽しむための環境構成が少ないからではないだろうか。

情報の８割は視覚からと言われているため、視覚をなくすと情報を入手することが困難になる。そこで他の感覚を鍛えるためには、視覚を取り除くと効果的であると考えた。人間は五感のバランスのとれた発達ができるようにしなければならない。視聴覚だけではなく、触覚・嗅覚・味覚の感覚を使わざるを得ない遊びを意図的に環境構成する必要がある。そこで、五感の中で触覚を鋭敏にする遊びを開発することを本研究の目的とした。

Ⅱ．研究方法

本研究では、最初に教育史における直観教授の系譜として、ルソー、ペスタロッチ、フレーベル、ヘルバルト、モンテッソーリ、レイチェル・カーソンについて調べた。その中で記憶や学習を鮮明なものにするためには、一つのものを漠然と見るのではなく、触れたり、匂ったり多くの感覚を同時に用いることが大切であることが分かった。

視覚だけでなく様々な感覚を用いることができるように、視覚を取り除くことで、聴覚・触覚・味覚・嗅覚を刺激できる教材を開発した。遊び方は、数個あるものから同じものを見つけたり、順番に並べたりするものである。どの玩具にも自分で答え合わせができるように配慮した。

開発した教材の有効性を調べるために、３歳と７歳の女児、５歳男児で実地調査を行った。そして、その結果をもとに教材の発達段階における妥当性を検討し、改善案を探った。

Ⅲ．結果および考察

年齢ごとに予想を立て、できるだろうと思ったことでも、子どもにとっては難しかったり簡単だったりすることがあった。実際に年齢の違う子どもに製作した五感の玩具で遊んでもらうことで年齢によって正答数に大きく差ができたが、問題の数を増減させることで対応ができた。情報収集に欠かせない視覚を意図的に取り除くということは、緊張感や圧迫感を与えてしまうため、子どもの反応や言葉にすぐに対応することを意識した。その結果、３～７歳でもこの感覚遊びを楽しむことができた。

「視覚」は大きさや形を認識することはできるが温度や重さは認識できない。そこで、触覚の玩具を手触り・重さ・温度に分けたり、見た目が全く同じものを用意したりすることで、視覚以外の感覚を使わざるを得ない状態をつくり出した。そこから分かったことは、子どもたちは視覚で判断できない分、繰り返すことにより答えを導き出そうとする傾向があることである。また、答え合わせができることによって、自分で誤りに気づくことができ、合っていたときに達成感を味わうことができていた。そして、一定の遊びよりも難易度を変化させることで子どもの興味を惹くことができることが分かった。

Ⅳ．今後の課題

五感を通して物の性質を探る活動をして明らかになった課題は、二点ある。

①感覚を用いた遊びは保育者の対応が必須であるため、多人数で一度に行うことはできない。集団保育では何らかの手だてが必要である。

②時間もかかることから発達段階ごとの集中可能な時間に合わせたプログラムの柔軟性が必要である。

①の課題に対しては、五感の玩具を身の回りにある物で量産することで対応し、②の課題に対しては子どもの集中力が途切れないように「聴覚＋嗅覚」など２つの感覚に絞る年齢に応じた工夫をすることで対応が可能である。

今回の研究で、五感には集中力や考える力が欠かせず、子ども自身で誤りに気づくことができ、繰り返しできる環境が必要であることが分かった。環境構成をする際には、子どもの健やかな成長のために五感のバランスがとれた子どもに適した環境構成に気をつけるべきだと考える。　　（担当教員 福井広和）